無からの創造は哲学的に証明可能か

――トマス・アクィナス，アラビア哲学，アルベルトゥス・マグヌスに即して――

小　林　　剛

1. トマスにおける無からの創造の問題点

トマス・アクィナス『神学大全』第 1 部第 45 問題第 1 項のタイトルは，「創造するとは無から何かを生み出すことであるか」である。この項の主文において，タイトルの命題「創造するとは無から何かを生み出すことである」が肯定される。その根拠は，創造とは，「神という普遍的原因からの全存在者の流出」だからであるとされる。この流出は，多くの校訂版が指示している通り，同第 44 問題第 2 項で検討されていると思われる。

また，同第 45 問題第 2 項のタイトルは「神は何かを創造し得るか」である。この項の主文においては，タイトルの命題「神は何かを創造し得る」が肯定されるのみならず，「神によってすべてのものが創造されたと措定しなければならない」とされ，「神は諸事物を無から存在へと産出する」と結論される。そしてその根拠は，神が「全存在の普遍的原因」だからであるとされる。これもまた，多くの校訂版が指示している通り，同第 44 問題第 2 項で検討されている内容であると思われる。

第 44 問題第 2 項のタイトルは「第一質料は神によって創造されたのか」である。この項の主文では，「存在者であるかぎりでの存在者」を考察する人々にとって，「存在者であるかぎりでの諸事物の原因」は，「いかなる仕方でであれ，これらのものの存在に属しているところのものすべてに即した」原因でなければならないとされ，これが「諸存在者

の普遍的原因」と呼ばれる。すなわち,「第一質料もまた，諸存在者の普遍的原因によって創造されたと措定されなければならない」と結論されるのである。

以上語られたような，全存在者・全存在・諸存在者の普遍的原因たる神とは，同第 44 問題第 1 項「存在者はすべて，神によって創造されたのでなければならないか」主文で語られる，自存する存在そのものである神のことであるとも思われる。確かにこの箇所では，第 44 問題第 2 項主文で語られていたように,「存在者であるかぎりでの存在者」が考察されているように思われる。そしてその原因たる神は,「存在に属しているところのものすべてに即した原因」であるようにも見える。

しかしここで大きな疑問が生じるように思われる。それは以下の通りである。すなわち，多くの校訂版が指示している通り，神が自存する存在そのものであるということは，同第 3 問題第 4 項「神において本質と存在は同じであるか」主文で証明されていると思われる。ここでは三つの証明が取り上げられている。その第三の証明で神は，分有による存在者ではなく，第一存在者であり，自身の存在であるとされる。これらの言葉遣いから，この第三の証明が，第 44 問題第 1 項の証明と直接つながっていると思われる。

しかし，第 3 問題第 4 項主文には他に二つの証明が取り上げられている。第一の証明では，神が第一作用因であるということが根拠とされている。第二の証明では,「神のうちにはいかなる可能態的なものもない」ということが根拠とされている。これはまさに，同第 2 問題第 3 項主文における，いわゆる神の存在証明第一の道の内容であろう。第一の証明は，第一作用因という用語からして，いわゆる第二の道に基づいているのであろう。第三の証明は，内容的に言って，いわゆる第四の道に基づいているのかもしれない。

いずれにしても，神が自存する存在そのものであるということが，第一の道が証明するように，神に可能態的なものが何もないこと，すなわち，神が純粋現実態であるということを根拠に証明されているということは否定できないだろう。そしてそのことを第二の道も第四の道も否定しないと考えられているであろう。とすれば，そのような神が，第 44 問題第 2 項で結論されているように，第一質料を創造するということ

は，果たして可能なのであろうか。というのも，トマスは第一質料を純粋可能態と考えている。可能態的なものが何もない，純粋現実態たる神が，一体どうやって，純粋可能態たる第一質料を創造することができるのであろうか。

2. アヴィセンナ宇宙論における三つの問題点

周知の通り，トマスにおけるいわゆる神の存在証明第一の道は，アリストテレス『形而上学』第 12 巻第 7 章の，いわゆる不動の動者の証明にその出発点を有している。しかし，この証明で示される第一動者・不動の動者たる神は，無からの創造をするどころか，作用因ですらない。すなわち，ここで神は目的因（欲求対象）としてしか示されていないのである。

ここでアリストテレスが証明する神が，同時に，一神教が考えるような神，特に，全知全能の神と調和するという議論は，主としてアラビア哲学者たちによって練り上げられた。このような動きは，キンディや彼のサークルによってすでに始められていたかもしれないが，本提題では，西洋への影響という観点から，アヴィセンナとアヴェロエスという二人のアラビア哲学者に注目する（以下の議論の詳細は拙著『アラビア哲学からアルベルトゥス・マグヌスへ――一神教的宇宙論の展開』参照）。

まずアヴィセンナの宇宙論を概観する。本提題では，トマスの時代にすでにラテン語訳され，よく読まれていたと思われるアヴィセンナ『治癒の書』「神的学（形而上学）」第 9 巻第 4 章の議論を紹介する。アヴィセンナ宇宙論は全体として，アリストテレス宇宙論を新プラトン主義的に解釈していると言って良いと思われる。すなわち，アリストテレス宇宙論には，星が貼り付いており，入れ子状に配置された複数の透明天球と，その動者たる不動の動者である知性が登場する。両者の関係は大変問題である。アリストテレス主義の歴史の中では，その中間として天球の魂が考えられてきた。

アヴィセンナは上記の箇所で，このようなアリストテレス宇宙論を次のように解釈する。すなわちまず，神である第一者から第一知性が流出する。そしてそこから第一天球（最外天球）の形相・魂と質料とが流出する。さらに第一知性から第二知性が流出し，そこから第二天球の形

相・魂と質料とが流出する。さらに第二知性から第三知性が流出し，以下同様にして宇宙全体が流出する。これは，一者から知性が，知性から魂が，魂から物体界が発出すると考える新プラトン主義の図式を，アリストテレス宇宙論に当てはめたものと見ることができる。

しかしここで，イスラーム神学者のガザーリーから，彼の『哲学者の矛盾』第 1 部第 16 問題で，アヴィセンナ宇宙論に対して，一神教との関連で一つの反論が提出される。それはすなわち，アヴィセンナが，天球の魂は純粋知性ではあり得ないとしたことに対する反論である。アヴェロエスは，ガザーリー『哲学者の矛盾』におけるこの箇所に対応する自身の『矛盾の矛盾』の箇所で，ガザーリーに賛成しつつ，天球の魂は純粋知性であるとする。

ここでガザーリーがアヴィセンナに反論したのは，神学的動機からではなく，純粋にアリストテレス解釈として不適当だからであった。しかしこのアヴィセンナの立場は，アリストテレス宇宙論で考えられている神を，一神教的な全知全能の神でもあると解釈しようとするときにも大きな問題となる。なぜなら，もしアヴィセンナが考えたように，天球の魂が純粋知性であり得ないとしたら，アリストテレスが考えた神，すなわち不動の動者は純粋知性であるはずなので，不動の動者は少なくとも，天球の回転運動の作用因ではあり得ないことになってしまうからである。

またアヴィセンナは『治癒の書』「神的学（形而上学）」第 8 巻第 6 章で，第一者たる神はすべてのものを普遍的な仕方でのみ知性認識するとしているが，そのことをガザーリーは『哲学者の矛盾』第 1 部第 3 問題 III で批判している。ガザーリーがこのような批判をしたのは，アヴィセンナが第一者たる神を純一なものと考えたことと矛盾するからであった。しかしこれも，アリストテレス宇宙論で考えられている神を，一神教的な全知全能の神でもあると解釈しようとするとき大きな問題となる。なぜなら，もし神がすべてのものを普遍的にしか認識しないとしたら，個別的なことは全く知らないことになり，全知ではなくなってしまうからである。実際アヴェロエスは，ガザーリー『哲学者の矛盾』におけるこの箇所に対応する自身の『矛盾の矛盾』の箇所で，やはりガザーリーに賛成しつつ，神の知性認識は普遍的でも個別的でもなく，そ

れ自体が諸存在者の（＝全存在者の）構造の実現であるとしているのである。

さらに，アヴィセンナ宇宙論の流出論の部分にも問題がある。「一つのものからは，一つのものしか生じない」という，13 世紀西洋において非常に人口に膾炙したフレーズは，先ほど検討したアヴィセンナ『治癒の書』「神的学（形而上学）」第 9 巻第 4 章に登場する。この箇所でこのフレーズが意味するところは，第一者は純一なので，第一者からは第一知性しか結果として流出しないということである。このような考えもまた，アヴィセンナ宇宙論が考える神を一神教的な全知全能の神であると理解しようとするとき大きな問題となる。なぜならこの場合，第一者たる神は第一知性しか創造することができないということになってしまうからである。

これに対してアヴェロエスは彼の『「形而上学」ラムダ巻大註解』第 44 章で，上記のようなアヴィセンナ流出論を批判する。上述の通りアヴィセンナは，第一者たる神の結果は第一知性だけと考える。しかしこの箇所のアヴェロエスによれば，第一者たる神の様々な類似性を第一知性以外の知性も知性認識すると考えれば，第一者たる神は第一知性以外の知性の原因でもあると見て差し支えない。確かに上記著作 9 巻 4 章のアヴィセンナによれば，第一者の結果が第一知性だけであるというのは，具体的に言えば，第一者は第一知性の存在可能性に受容される存在必然性の原因であるという意味である。しかしその存在必然性は，第一知性以下の諸知性の存在可能性に受容される存在必然性の原因でもあると考えられるので，その存在必然性を通して第一者は，第一知性だけでなく，第一知性以外の知性の原因でもあると考えることは，不可能ではないのである。

3. アルベルトゥス流出流入論と質料の原因

トマスの師であるアルベルトゥス・マグヌスは，アリストテレス宇宙論解釈において，特に天体の魂，神の知性認識，流出論について，上述のアヴェロエスの立場を継承する。アルベルトゥスの時代にはまだ，ガザーリー『哲学者の矛盾』も，アヴェロエス『矛盾の矛盾』も，アラビア語からラテン語に翻訳されていなかった。しかしアルベルトゥスは，

アヴィセンナの考えを彼の『治癒の書』や，すでにラテン語訳されていたガザーリー『哲学者の意図』から，そして宇宙論に関するアヴェロエスの考えは主に彼の『「形而上学」ラムダ巻大註解』から知っており，アヴィセンナとアヴェロエスの考え方のちがいにも気が付いていた。

それだけではなくアルベルトゥスはさらに，アヴェロエスによるアヴィセンナ流出論批判を，神と諸知性の関係からさらに，神と他の全存在者の関係へと拡大適用させる。そこでは，アヴェロエスと異なり，天球の動者たる知性は，天球を回転させるだけでなく，天球に天球の実体・本質を与え，また，天球に貼り付く星の光輝によって，月下のすべての物体を生じさせると考えられる。ここからアルベルトゥス独自の形而上学「流出流入論」が誕生するのである。

この流出流入論は，アルベルトゥス『「原因論」註解』（原題は *De causis et processu universitatis a prima causa*）第 1 巻第 4 論考第 1 ～ 8 章で語られる。この形而上学の哲学史上最大の特徴は，流出と流入を区別することである。すなわちこの理論によれば，流出（fluere）するのは，流出の第一源泉と同じ純一な形相・現実態だけである。この点で通常の新プラトン主義的流出・発出論とは明確に異なる。一方流入（influere）とは，固有な意味では，様々な可能態による流出の受容・保持のことである。

こうしてアルベルトゥスは，アリストテレスの可能態概念を，物体のみならず，諸知性にも拡張し，神と他の全存在者の関係を，純粋現実態と，それを受容する可能態と受容された現実態との複合体の関係として捉える。そしてこのような仕方で，アリストテレスが考える神を，一神教的な全知全能の神として解釈する道を体系的に開いたのである。実際アリストテレスによれば，或るものの働きも，その或るものについての認識も，その或るものが有する現実態によって生じるのである。

しかしここで問題が残る。もし一神教的な神が，全知全能の神であるだけでなく，同時に，無からすべてを創造する神でもあるならば，すべての現実態だけでなく，すべて可能態もまた神に由来するのでなければならないのではないだろうか。この点についてアルベルトゥスは『「原因論」註解』の中ではほとんど何も明確には述べていない。しかしアルベルトゥスは彼の『「神名論」註解』の中で，形相だけでなく質料も神

に由来すると措定されるのは，あくまでも信仰に即してのことであると述べている（*Super dionysium de divinis nominibus*, c.7, 3）。この立場は基本的に『「原因論」註解』においても変わっていないと思われる。

トマス存在論も基本的には，アルベルトゥス流出流入論と同じように，神と他の全存在者の関係を，純粋現実態と，それを受容する可能態と受容された現実態との複合体の関係として捉えると言って良いだろう。確かにトマスの場合，このような存在論に関わる思想的影響関係は，アルベルトゥスほどテキスト上明白ではない。しかし少なくとも大きな枠組みとしては，アラビア哲学を通した新プラトン主義的アリストテレス主義の影響をトマスにおいて否定することはできないと思われる。

また，このようなトマス存在論とアルベルトゥス流出流入論との相互影響関係については，テキスト上の精査が今後期待される。実際アルベルトゥスの『「原因論」註解』は 1264 年から 67 年の間という彼の最晩年に書かれたと推測されている。しかしその一方，彼の流出流入論を含め，この著作で語られている内容は，アルベルトゥスの最晩年に急に現れた立場ではなく，それまでの知的営みの中で徐々に形成されていったとも考えられるのである。

4. トマスにおける第一質料の創造再考

もう一度，トマス『神学大全』第 1 部第 44 問題第 1，2 項に戻ろう。以上述べてきたようなアリストテレス主義の歴史を振り返ると，アリストテレス『形而上学』第 12 巻第 7 章で語られた神の解釈だけから，第一質料までも創造する神を導出することは難しいように思われる。そこで今ここでこの第 44 問題第 2 項を，同第 13 問題第 3 項，特にその第 1 異論解答を踏まえて解釈してみることにしよう。

> 諸々の或る名称は，分有の何らかの仕方がそれらの〔名称の〕表示に含まれることなく，完全性自体を絶対的に表示する。それはたとえば存在者，善，生きものなどである。そしてこのようなもの〔名称〕は固有に神について語られる。

ここで語られている「或る名称」に例えば「現実態」も含まれると考えてみよう。通常私たちが知っている現実態は，可能態を現実化しはするが，可能態自体を生み出したりはしない。しかしそれはあくまでも現実態の「分有の何らかの仕方」なのであって，「現実態」という名称の表示にはそれは含まれないと考えてみよう。もしそうだとすれば，可能態自体を生み出す現実態（無から創造する神）が存在しても別に構わないということになる。しかしそれでも，同第 44 問第 2 項で語られるように，「第一質料もまた，諸存在者の普遍的原因によって創造されたと措定されなければならない」とまではとても言えないと思われる。

また，トマスにおける神の存在証明第四の道を考えてみたところで話は同じであるように思われる。なぜなら，存在を分有しているということは，必ずしも無から創造されているということを意味するわけではないからである。実際トマスにおいて，確かに第一質料は或る種の存在者であろう。しかし第一質料は，実在的には純粋可能態のままで存在することは決してなく，何らかの形相・現実態を受容して存在していると考えられている。そのような事態を「存在を分有している」と捉え，そのことの原因として神を考えることも十分可能だからである。

となるとやはり，第一質料自体も創造されたのでなければならないと断言できるためには，哲学とは何か別の前提，たとえば聖書や教会の教えといった啓示などを導入しなければならないように思われる。そしてそのことは，トマス『神学大全』という著作の性格を考えると，そう不思議な事ではないように思われる。というのも，トマスは『神学大全』の序で，「聖なる教えに属する諸々のことを追求する」と語っており，同第 1 部第 1 問題第 1 項「哲学的諸学科の他に，他の教えを有することは必要か」主文では，この聖なる教えを「聖なる啓示に即した何らかの教え」と呼んでいる。しかもトマスは同箇所で，「神について人間理性で探求され得る諸々のことのためにも，神の啓示によって人間が導かれる必要があった」と語っている。つまりトマスによれば，聖なる教えの基となっている啓示には，人間理性で探求可能な内容，すなわち哲学的内容も含まれているのである。だから，トマスは『神学大全』の中で，証明の根拠が純粋に理性的なものか，それとも啓示によるものか，あえて区別して明示しなくても何の不思議もないのである。

以上すべての議論から，本提題では次のような解釈を提案したい。すなわち，トマス『神学大全』第 1 部第 44 問題第 2 項，45 問題第 1，2 項で語られる，諸存在者・全存在者・全存在の普遍的原因は，同第 44 問題第 1 項，第 3 問題第 4 項で語られる自存する存在そのものからは直接的には導出されず，導出されるためには何らかの啓示を必要とする。

しかしもしこのような解釈が妥当だとしたら，なぜ上記の諸箇所の証明は，少なくとも表面的には，これほどまでに哲学的なのであろうか。トマスに何らかの意図があったのであろうか。私はここで一つの見通しを提案したい。ロジャー・ベーコンの証言によれば，アルベルトゥスは 13 世紀のパリ大学において，アリストテレス，アヴィセンナ，アヴェロエスにならぶ学問的権威であった（*Opus Tertium*, ed. J. S. Brewer, London, Longmans, 1859, p.30）。だから，アルベルトゥスが，13 世紀のちょうど真ん中頃（1250 年頃）から，哲学と神学を明確に区別するようになったことも（彼の『「神名論」註解』もちょうどこの頃書かれた），人々によく知られていたことだろう。

それゆえその弟子であるトマスが彼の『神学大全』の中で，そのように神学とは明確に区別された哲学が，今度は逆に，キリスト教の教説とどのように総合され得るかという課題に，「聖なる教え」の名の下に取り組み始めたとしても不思議ではないように思われる（トマスが『神学大全』に着手したのは 1266 年頃）。ただし，もし仮にそうだとしても，思想史的文脈を全く度外視して，純粋にトマス『神学大全』における無からの創造に関する議論だけを取り出して見た場合には，全く啓示抜きに，純粋に哲学的に証明しようとしていると見られても致し方ないかもしれない。

まとめと補足

トマスが『神学大全』で語るように，可能態的なものが何もない純粋現実態である神が，純粋可能態である第一質料自体を創造すると考えることは，果たして可能であろうか。アヴェロエスはアヴィセンナ宇宙論の諸問題を修正し，アリストテレスが考える神を，一神教における全知全能の神と調和する神として解釈する道を開いた。アルベルトゥスはこ

のようなアヴェロエスを継承し，彼独自の形而上学である流出流入論を打ち立てる。そこでは，神の現実態を様々な可能態が様々な仕方で受容・保持することによって世界は成立していると考えられている。しかしその一方で，神が質料という可能態自体をも生み出すとアルベルトゥスが考えるのはあくまでも信仰に即してのことである。そしてトマスにおいても，彼らと全く別な哲学理論が見当たらない以上，神が第一質料自体を創造するとされるのは，信仰・啓示に即してのことであると解釈すべきであるように思われる。ただしこの議論だけを，思想的文脈も無視して『神学大全』から取り出せば，純粋な哲学的議論と取られる可能性は否定できない。

本提題では，トマスにおける無からの創造に関する見解については，もっぱら『神学大全』のみを取り上げた。ちなみに，『対異教徒大全』における平行箇所でのトマスの見解は，前者とは全く異なる。すなわち，後者第 2 巻第 16 章「神は諸事物を無から存在へと産出したということ」をトマスは，「神が諸事物を存在へと産出したのは，質料のような先在する何ものからでもない」と語ることで始めている。その後の各議論においても，その結論はほぼすべて，「先在する質料を必要としない」という類のものとなっている。つまりこの箇所では，諸事物を「無から産出した」ということが，「先在する質料なしに産出した」という意味と同一視されているのである。

トマスによれば，神の働きは永遠であるので，それに対して時間的に先在するものがないのは当たり前である。一方第一質料は，生成消滅せず，その意味では永続的であるので，こちらも時間的に先在するものとは言えない。第一質料は時間的にではなく，自然本性的に先在するのだと仮に言おうとしたとしても，第一質料は純粋可能態であり，究極的には純粋現実態に順序付けられているので（アリストテレス『形而上学』第 9 巻第 8 章参照），その意味でも先在するものとは言えない。だからこの箇所では，『神学大全』におけるように，「無から創造する」ということが，即「第一質料自体を創造する」ことを意味するような話には全くなっておらず，あくまでもトマスの哲学的理解の範疇に収まった議論になっているのである。